

# 多様な性に関する授業を通じた 中学・高校生の意識の変化

渡 邊 歩

## I 問題と目的

現在、日本における性的マイノリティへの理解は徐々に広まりつつあるものの、依然として無理解や偏見を持つ人がある。性的マイノリティとは、一般に性的マジョリティとされている異性愛やシスジェンダー（身体の性別と自身が自認する性が一致している状態のこと）に属さないセクシュアリティのことを指している（例：同性愛、両性愛、無性愛、トランスジェンダーなど）。日本における性的マイノリティ人口に関する調査は複数あるものの、大阪市を対象にした人口学に基づいた最新の調査によると3.3%が性的マイノリティに該当していることが報告されている（釜野, 2019）。

2015年4月には、文部科学省より全国の小・中・高等学校に向け「性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細やかな対応の実施等について（通知）」が出され（文部科学省, 2015）、性的マイノリティの生徒へ必要な情報提供を行うことを含め指導・助言をするよう配慮が求められた。この通知の背景には、周囲の性的マイノリティに対する無理解によるいじめ被害の多さ、恋愛感情や身体変化を伴う第二次性徴を通じて自身のセクシュアリティを自覚する思春期に正しい情報にアクセスできないこと、これらに伴うメンタルヘルスの低下と自殺未遂率の高

さが指摘されている（中塚, 2011；日高・古谷野・松高・星野, 2015）。実際に教育の機会について、全国の性的マイノリティ当事者に対し調査を行った日高（2017）の報告では、10代の性的マイノリティ当事者の約75%が未学習あるいは不適切な情報を与えられていたことが明らかとなった。このことから、性的マイノリティ当事者の子どもだけでなく、その周囲の生徒に対して適切な教育および支援が必要だと考えられる。

### 1. 性的マイノリティに対する理解の実態

性的マイノリティの知識に関する調査では、年代や性別による差があることが指摘されており、女性の方が男性よりも知識を有していることが明らかにされている（釜野・石田・風間・吉仲・河口, 2016；和田, 2010）。全国の20歳から79歳を対象に意識調査を行った釜野ほか（2016）の研究では、同性愛に関してはおよそ半数、性同一性障害に関しては3割程度しか正しい知識を有していないことが明らかとなった。また、性的マイノリティについて見聞きしたメディアはテレビが主であり、その内容は報道・教養よりも娯楽番組が多いことも示された。高校生を対象に授業を行った福島（2015）の報告でも同様の傾向が見られたことから、性的マイノリティに関する正確な知識は、およそ

半数程度しか知られていない実態が明らかとなった。

次に、性的マイノリティに対する態度については、関係性の親密さやセクシュアリティによって多少異なるものの、傾向として女性よりも男性の方が抵抗感が強く、男性で年代が高い人ほど抵抗感や嫌悪感を持つ人が多いことが示された（釜野ほか、2016）。また、複数の研究から、性的マイノリティに対しては半数程度の人が抵抗感を持っているものの、友人に当事者がいたり、性的マイノリティに関する知識を持っていることが、性的マイノリティに対する抵抗感や嫌悪感の低減に繋がることが明らかにされた（釜野ほか、2016；和田、2008）。

友人からのカミングアウト時の対応について、釜野ほか（2016）の研究では、「理解したい」「言ってくれてうれしい」のような好意的な対応が9割ほどで、女性や若い年代に多く、「どうでもいい」「聞かなかったことにしたい」のようなネガティブな反応は2割前後で、男性に多いことが分かった。さらに「気持ち悪い」を選択した割合は男女とも1割程度であり、この回答は高齢者に多いことが示された。このことから、親しい友人からのカミングアウトに対してポジティブな態度を示すのは若い世代で、男性よりも女性の方が多いことが明らかとなった。

これらの調査結果から、まだまだ性的マイノリティの理解が進んでいないことや、性的マイノリティに対する抵抗感がある人が一定数存在することが分かった。石丸（2004）は、他者からの受容感が同性愛・両性愛者の自尊心に影響を与えることを示唆していたことから、性的マイノリティ当事者たちが受容されていると感じ自尊心を高めるためにも、知識を伝えること

や、性的マイノリティと交流を持つことは有効であると考えられる。

## 2. 多様な性に関する授業実践

現在、性的マイノリティを含む性の多様性に関する授業実践は、学校の授業や講演会、研修会など多くの場で行われている。日本での授業実践をまとめた戸口・葛西（2016）によると、多様な性に関する授業は、主に性教育や人権教育での文脈で行われており、その多くが独自の経験に基づいて工夫されたものである可能性があることを指摘した。授業内容は、主に①批判的思考の訓練（既存の男女二元制への気づき、自身が多様な性の中の1人であることに位置づけられることへの気づきなど）、②知識の獲得（性的マイノリティの実態、性の構成要素など）、③技術と態度の改善（スキル、支援のあり方など）、④実体験の理解（当事者の体験の説明および共有など）が要素として報告された。しかし、まだ学校での授業による教育効果については実践研究が少ないことから、今後実践研究の積み重ねが必要であることが考えられる。

## 3. 本研究の目的

これらのことから本研究では、(1) 中学・高校生の性的マイノリティに対する意識の実態を明らかにすることと、(2) 性的マイノリティも含む多様な性に関する授業を実施することで、中学生や高校生の性的マイノリティに関する意識にどのような変化があるかを検討することを目的とする。なお、今回は人権教育の文脈での授業実践となることから、文部科学省（2008）が人権を通じて育てたい資質・能力としてあげている側面のうち、性的マイノリティに対する

(a) 知識的側面、(b) 価値的・態度的側面に焦点をあてて、検討をする。

## II 方法

### 1. 調査対象

認定特定非営利活動法人 ReBit（以下 ReBit）に出張授業の依頼をしてきた中学校と高校に本調査の趣旨を説明し、承諾を得た中学校3校、高校3校を調査協力校とした。調査時期は2017年9月から2018年1月である。

### 2. 授業の概要

授業は、ReBitで講師を務める性的マイノリティ当事者を自認する学生・若者2-3名により実施された。授業は「総合的学習の時間」や「人権教育」といった授業の枠で実施され、それぞれ90分ほどで実施された。授業内容は戸口・葛西（2016）を参考に構成された（Table 1 参照）。

### 3. 質問紙

本研究では、授業実施前後の協力者の性的マ

イノリティに関する意識の変化を見るために、質問紙法によって授業の効果検証を行った。質問紙は、性的マイノリティに関して知識があり、大学院で教育学や心理学を修了した複数のメンバーで作成した。質問項目では、文部科学省（2008）が人権を通じて育てたい資質・能力としてあげている側面のうち、(a) 知識的側面、(b) 価値的・態度的側面についてそれぞれ7項目ずつ作成した。また、授業前段階の調査において、本調査の主眼である「セクシュアルマイノリティ」という用語の定義が分からない状態での回答を防ぐため、脚注に説明を加えた。

#### (a) 知識的側面に関する項目

知識的側面に関する項目は、文部科学省（2008）が示す「自他の人権を尊重したり人権問題を解決したりする上で具体的に役立つ知識」を基準にし、複数の先行研究（釜野ら、2016；福島、2015；渡辺、2012；和田、2008、2010）を参考にしながら、今回の授業内で取り扱う内容かどうかきに留意しながら作成された（Table 2 参照）。「以下の項目に最もあては

Table 1 授業の内容

概要（所要時間）	主なねらい	内 容
知識の提示（15分）	<ul style="list-style-type: none"> <li>性的マイノリティに関する正しい知識を知る</li> <li>自分が多様な性の中にいることを知る</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>性的マイノリティに関する基礎知識の説明</li> <li>国内にいる性的マイノリティ人口の割合</li> <li>性的マイノリティ、異性愛、シスジェンダーを含む多様な性のあり方のグラデーション</li> <li>多様な性について学ぶことの意義</li> </ul>
当事者との出会い（20～40分）	<ul style="list-style-type: none"> <li>当事者の話を聞くことで自分と比較してみる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>性的マイノリティ当事者を自認する学生・若者2-3名による自身のセクシュアリティ説明とライフストーリー（幼稚園～現在まで）</li> </ul>
当事者の声（10分）	<ul style="list-style-type: none"> <li>当事者の困りごとについて知る</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>カミングアウトや学校での困りごと、将来などに関するトークセッション</li> </ul>
質疑応答（10分）		<ul style="list-style-type: none"> <li>生徒からの質疑に回答</li> </ul>
まとめ（5分）		<ul style="list-style-type: none"> <li>誰もが多様な性の中の1人である</li> <li>性のあり方の違いをきっかけに、どんな違いも受け入れあえる社会へ</li> </ul>

Table 2 知識的側面の質問内容

No.	質問内容	正誤
1	LGBTはレズビアン・ゲイ・バイセクシュアル・トランスジェンダーの頭文字をとった言葉だ	○
2	性別は男か女のどちらかである	×
3	性のあり方はからだの性だけで判断できる	×
4	セクシュアルマイノリティの人かセクシュアルマイノリティでない人かは見た目だけで判断できる	×
5	ゲイの人はみんな女性になりたい人だ	×
6	セクシュアリティ（性のあり方）は人の数だけある	○
7	セクシュアルマイノリティの人は国内に約1%いると言われている	×

Table 3 価値的・態度的側面の質問内容

No.	質問内容
1	多様な性についての話は自分には関わりのないことだと思う
2	身近な人にカミングアウトされても力にはなりたくないと思う
3	LGBTをネタにしている人がいたら注意していきたいと思う
4	自分のセクシュアリティに関わらず、ありのままの自分を大事にしたい
5	その人の特性にかかわらず、周囲の人を大事にしたい
6	多様な性について中学生（や高校生）に伝えるべきだ
7	LGBTについて学ぶことは他の多様性について考えることにつながると思う

まる選択肢を1つ選んで□を塗りつぶしてください。」と教示文を示し、「正しい」、「正しくない」、「わからない」の3件法で回答を求めた。

#### (b) 価値的・態度的側面に関する項目

価値的・態度的側面に関する項目は、文部科学省（2008）が示す「個人の尊厳をはじめ、自他の人権を尊重することの意義や必要性に対する肯定的な評価と受容、責任感や共感性・連帯性、人権擁護の実現を目指す意欲や態度」という点を基準に、複数の先行研究（釜野ら、2016；福島、2015；渡辺、2012；和田、2008、2010）を参考にしながら作成された（Table 3 参照）。

「以下の項目に最もあてはまる選択肢を1つ選んで□を塗りつぶしてください。」と教示文を示し、「全くそう思わない」から「非常にそう思う」の6件法で回答を求めた。なお、7項目の内、2項目は逆転項目であった。

### 3. 分析手法

#### 分析対象

回収した2921部のうち、回答に不備のあった回答用紙を除き、有効回答数は2619部であった。内訳は、中学生の事前回答用紙が900部（1年生298部、2年生313部、3年生289部）、事後回答用紙が854部（1年生281部、2年生290部、3年生283部）であり、高校生の事前回答用紙が449部（1年生143部、2年生142部、3年生164部）、事後回答用紙が416部（1年生136部、2年生146部、3年生134部）であった。

#### 分析手続き

調査協力を得られた学校の各学級において、担当教員により事前用質問紙を配布し、一斉に回答を求め、回収した。その後授業を実施し、終了後に事後用質問紙を配布・回収した。調査対象者には、質問紙への回答は任意であること、調査には協力しないことによって何ら不利益は受けないこと、回答したくない項目には無

理に回答しなくてよいことを担当教員から伝えた。なお、質問紙は無記名で実施したため、事前と事後で調査協力者の対応はしていない。

### (a) 知識的側面

Table 2 で示した 7 つの質問項目について、正解するごとに 1 点、不正解や「わからない」を選択した場合 0 点とした。まずは多様な性に関する知識についての実態調査として、中学・高校におけるそれぞれの授業前後における各質問項目の正答率を明らかにした。その後、知識的側面に関する得点を「知識得点」とし、中学・高校における授業前後の平均値を比較するために  $t$  検定を実施した。

### (b) 価値的・態度的側面

Table 3 で示した 7 つの質問項目について、まずは多様な性に対する中学・高校における価値・態度についての実態調査をするために、価値的・態度的側面の各質問項目に対する回答のうち、「非常にそう思う」「そう思う」「ややそ

う思う」と回答した人数を統合し、「ポジティブ」な価値観・態度を持つ者としてカウントした。逆に「全くそう思わない」「そう思わない」「あまりそう思わない」と回答した人数を統合し、「ネガティブ」な価値観・態度を持つ者としてカウントした。なお、質問 1 と 2 は逆転項目処理を行い、それぞれの質問項目ごとの回答から実態を明らかにした。その後、価値的・態度的側面に関する得点を「価値・態度得点」とし、中学・高校における授業前後の平均値を比較するために  $t$  検定を実施した。

## III 結果

### 1. 知識的側面

#### (1) 知識的側面の実態

知識的側面の各質問項目に対する事前・事後の正答率と人数は Table 4 のようになった。「1: LGBT はレズビアン・ゲイ・バイセクシュアル・トランスジェンダーの頭文字をとった

Table 4 知識的側面における各質問項目の回答割合（単位％）

		事 前			事 後		
		正解	不正解	分からない	正解	不正解	分からない
1	中学	20.4 (183)	1.2 ( 11)	78.3 (705)	94.7 (809)	0.6 ( 5)	4.7 ( 40)
	高校	59.2 (266)	0.7 ( 5)	40.1 (180)	97.1 (404)	1.7 ( 7)	1.2 ( 5)
2	中学	15.4 (139)	55.2 (497)	29.3 (264)	63.3 (541)	21.1 (180)	15.6 (133)
	高校	39.0 (175)	33.9 (152)	27.2 (122)	82.7 (344)	9.1 ( 38)	8.2 ( 34)
3	中学	28.2 (254)	16.6 (149)	55.2 (497)	80.1 (684)	5.4 ( 46)	14.5 (124)
	高校	60.4 (271)	4.9 ( 22)	34.7 (156)	92.5 (385)	1.4 ( 6)	6.0 ( 25)
4	中学	21.2 (191)	1.7 ( 15)	77.1 (694)	77.8 (664)	2.5 ( 21)	19.8 (169)
	高校	57.7 (259)	2.0 ( 9)	40.3 (181)	93.5 (389)	1.2 ( 5)	5.3 ( 22)
5	中学	24.9 (224)	7.2 ( 65)	67.9 (611)	75.1 (641)	3.5 ( 30)	21.4 (183)
	高校	51.7 (232)	5.3 ( 24)	43.0 (193)	88.9 (370)	2.4 ( 10)	8.7 ( 36)
6	中学	19.8 (178)	4.6 ( 41)	75.7 (681)	63.5 (542)	11.4 ( 97)	25.2 (215)
	高校	47.9 (215)	6.2 ( 28)	45.9 (206)	86.5 (360)	6.5 ( 27)	7.0 ( 29)
7	中学	4.2 ( 38)	3.7 ( 33)	92.1 (829)	47.8 (408)	6.0 ( 51)	46.3 (395)
	高校	15.4 ( 69)	4.2 ( 19)	80.4 (361)	70.7 (294)	8.9 ( 37)	20.4 ( 85)

( ) 内は人数。中学事前 (900)、中学事後 (854)、高校事前 (449)、高校事後 (416)。



言葉だ」は、授業後で中学は 94.7%，高校は 97.1%と増加しており、この値は全項目の中で一番大きかった。また、高校では事前の段階で正答が 59.2%いたことから、高校生は既に約 6 割が「LGBT」という用語を知っていることが分かった。「2：性別は男か女のどちらかである」は、授業前後で中学・高校ともに正答率は増加したものの、中学は 63.3%と他の項目と比較して低く、授業後でも不正解が 21.1%，「分からない」と回答した生徒が 15.6%いたことが分かった。このことから、高校生よりも中学生の方が、性別が男女だけではないことを学んでいないことが分かった。「3：性のあり方はからだの性だけで判断できる」では、授業前後で中学・高校ともに得点が増加していた。特に高校生は「1」と同様、授業前の段階で 60.4%の生徒が正答していたことから、既に「からだの性」以外の性のことを約 6 割が知っていることが示された。「4：セクシュアルマイノリティの人かセクシュアルマイノリティでない人かは見た目だけで判断できる」は、授業前後で中学・高校ともに正答率は増加し、中学で 77.8%，高校で 93.5%の生徒が正解をしていた。この項目でも、高校生は授業前の段階で 57.7%の生徒が正答していたことから、既に「見た目で人のセクシュアリティは分からない」ということを知っている高校生が半数以上いることが分かった。「5：ゲイの人はみんな女性になりたい人だ」についても、授業前後で中学・高校ともに正答率は増加しており、中学で 75.1%，高校で 88.9%に増加した。この結果から、高校生は授業前の段階で約半数以上がゲイは「みんな女性になりたい人」ではないという知識を持っていることが分かった。「6：セクシュア

リティ（性のあり方）は人の数だけある」では、授業前後で中学・高校ともに正答率は増加したものの、中学は 63.5%の正答率と、他の項目と比較して低かった。このことから、今回の授業では「セクシュアリティは人の数だけある」ということを約 4 割が学べていないことが分かった。「7：セクシュアルマイノリティの人は国内に約 1%いると言われている」では、授業前後で中学・高校とも回答率は伸びたものの、中学では 47.8%，高校では 70.7%にとどまった。この項目は事前・事後で最も正答率が低かったことから、この知識を獲得した生徒があまり多くないことを示した。

これらの結果から、すべての項目で授業前よりも授業後の方が中学・高校ともに正答率が伸びていることや、それぞれの知識に関する中学・高校生の実態が明らかになった。また、高校生の方が中学生よりも、既にある程度セクシュアルマイノリティや性の多様性に関する知識を保持していることが分かった。

## (2) 授業前後の知識得点の変化

知識得点の結果は Table 5, Figure 1 のようになった。まず、中学・高校それぞれにおける事前・事後の平均値の差を調べるために  $t$  検定を行ったところ、事前よりも事後の方が中学・高校ともに有意に知識得点が高いことが分かった（中学： $t = -43.72, p < .001$ , 高校： $t = -23.26, p < .001$ ）。また、事前・事後における中学・高校間の知識得点の差を比較したところ、それぞれに有意差が見られた（事前： $t = -17.01, p = .001$ , 事後： $t = -12.08, p < .001$ ）。この結果と平均値から、事前・事後どちらにおいても、中学生よりも高校生の方が有意に高い得点を示していた。

Table 5 知識得点の結果

		事前		事後	
		M	SD	M	SD
	知識得点				
	中学	1.34 (19.1%)	1.64	5.02 (71.7%)	1.87
	高校	3.13 (44.7%)	2.16	6.12 (87.4%)	1.32

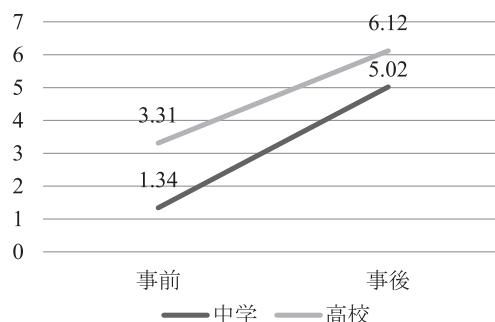


Figure 1 知識得点の推移

Table 6 価値的・態度的側面における各質問項目の回答割合（単位%）

		事前		事後	
		ポジティブ	ネガティブ	ポジティブ	ネガティブ
1	中学	45.2 (407)	54.8 (493)	76.0 (649)	24.0 (205)
	高校	64.1 (288)	35.9 (161)	89.9 (374)	10.1 ( 42)
2	中学	69.9 (629)	30.1 (271)	85.0 (726)	15.0 (128)
	高校	84.4 (379)	15.6 ( 70)	92.5 (385)	7.5 ( 31)
3	中学	62.9 (566)	37.1 (334)	82.6 (705)	17.4 (149)
	高校	76.8 (345)	23.2 (104)	91.3 (380)	8.7 ( 36)
4	中学	78.3 (705)	21.7 (195)	89.1 (761)	10.9 ( 93)
	高校	91.3 (410)	8.7 ( 39)	95.4 (397)	4.6 ( 19)
5	中学	83.0 (747)	17.0 (153)	90.5 (773)	9.5 ( 81)
	高校	91.3 (410)	8.7 ( 39)	95.0 (395)	5.0 ( 21)
6	中学	59.9 (539)	40.1 (361)	82.0 (700)	18.0 (154)
	高校	88.2 (396)	11.8 ( 53)	95.7 (398)	4.3 ( 18)
7	中学	62.6 (563)	37.4 (337)	86.8 (741)	13.2 (113)
	高校	89.8 (403)	10.2 ( 46)	95.7 (398)	4.3 ( 18)

（ ）内は人数。中学事前（900）、中学事後（854）、高校事前（449）、高校事後（416）。

これらの結果から、中学・高校ともに知識得点は授業後の方が高くなることが示唆された。また、知識得点は、中学生よりも高校生の方が授業前も授業後も高いことが明らかになった。

## 2. 価値的・態度的側面

### (1) 価値的・態度的側面の実態

価値的・態度的側面の各質問項目に対する回答割合と人数は Table 6 のようになった。

「1：多様な性についての話は自分には関わりのないことだと思う」において、事前では中学で 45.2%、高校で 64.1%の生徒しか多様な性と自分との関連性について意識していなかった。授業後は、ポジティブな回答が中学・高校ともに増加していたものの、中学・高校ともに授業前にポジティブな態度を有していた人数は、他の項目と比べて最も低かった。このことから、事前の段階で「多様な性について学ぶこ

とは自分には関わりのないことだと思う」と考えていた生徒が半数前後と多いことが示された。「2：身近な人にカミングアウトされても力にはなりたくないと思う」は、事前の段階で既に中学では69.9%、高校では84.4%の生徒がポジティブな態度を選択していた。授業後も、中学では85.0%、高校では92.5%の生徒がポジティブな態度を選択していたことから、ほとんどの生徒が授業前の段階で「カミングアウトされたら力になりたい」と考えていたことが分かった。「3：LGBTをネタにしている人がいたら注意していきたいと思う」は、事前では中学で62.9%、高校で76.8%の生徒がポジティブな態度であることが分かった。授業後は中学で82.6%、高校で91.3%と、授業前よりもポジティブな態度をとることを選択した回答者が増加していたことから、性的マイノリティへの揶揄に対して注意していきたいという態度を持つ生徒が授業により増加したことが分かった。「4：自分のセクシュアリティに関わらず、ありのままの自分を大事にしたい」は、事前で中学では78.3%、高校では91.3%の生徒がポジティブな態度を選択しており、授業後も、中学では89.1%、高校では95.4%の生徒がポジティブな態度を選択していた。これらのことから、ほとんどの生徒が授業前の段階で自分のセクシュアリティも含め自分自身を大切にしたいという気持ちを持っていることが分かった。「5：その人の特性にかかわらず、周囲の人を大事にしたい」は、中学で83.0%、高校で91.3%と、事前では中学で最もポジティブな回答の割合が高く、授業後も、中学・高校ともに9割以上の生徒がポジティブな態度を選択していた。このことから、「4」と同様、事前で既にほとんどの

中学・高校生がポジティブな態度を有していることが分かった。「6：多様な性について中学生（や高校生）に伝えるべきだ」では、授業前で中学では59.9%、高校では88.2%がポジティブな態度を選択していた。授業後は中学では82.0%、高校では95.7%とポジティブな態度の回答率が増加していたことから、授業を通じてさらに多様な性について学ぶことをポジティブに捉える生徒が増えたことが示された。「7：LGBTについて学ぶことは他の多様性について考えることにつながると思う」では、事前で中学では62.6%、高校では89.8%がポジティブな態度を選択しており、授業後は中学で86.8%、高校で95.7%の生徒がポジティブな態度を選択していた。このことから、ほとんどの生徒が性的マイノリティについて学ぶことが、他の多様性を考える事につながると考えていることが分かった。

これらの結果から、すべての項目で授業前よりも授業後の方が中学・高校ともにポジティブな価値観・態度を持つことが分かった。また、既に半数以上の生徒が性の多様性に関してポジティブな価値観・態度を有しており、特に中学生よりも高校生の方が授業前の段階でポジティブな態度を有していることが分かった。

## (2) 授業前後の価値・態度得点の変化

価値・態度得点の結果はTable 7, Figure 2のようになった。まず、中学・高校それぞれにおける事前・事後の平均値の差を調べるために $t$ 検定を行ったところ、事前よりも事後の方が中学・高校ともに有意に価値・態度得点が高いことが分かった（中学： $t = -16.62$ ,  $p < .001$ , 高校： $t = -9.48$ ,  $p < .001$ ）。また、事前・事後における中学・高校間の差の比較



Table 7 価値・態度得点の結果

価値・ 態度得点		事前		事後	
		<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
	中学	27.45 (65.4%)	6.00	32.41 (77.2%)	6.45
	高校	31.70 (75.5%)	5.59	35.25 (83.9%)	5.43

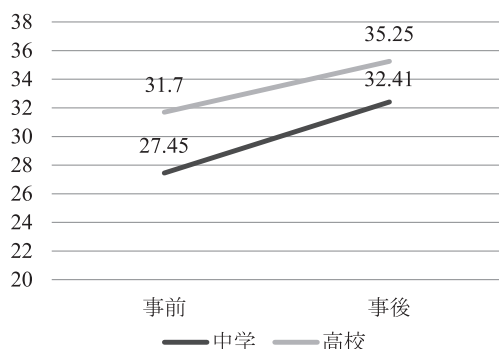


Figure 2 価値・態度得点の推移

を行ったところ、それぞれ有意差が見られた（事前： $t = -12.53$ ,  $p < .001$ , 事後： $t = -8.24$ ,  $p < .001$ ）。この結果と平均値から、事前・事後どちらにおいても、中学生よりも高校生の方が有意に高い得点を示していた。

これらの結果から、価値・態度得点は授業後の方が高くなることが示唆された。また、価値・態度得点は中学生よりも高校生の方が事前も事後も高いことが分かった。

## IV. 考察

### 1. 知識的側面

まず、実態として、授業を受ける前段階で高校生は約半数、中学生は約2割程度が性的マイノリティに関する知識を有しており、高校生の方が中学生よりも有意に知識を持っていることが分かった。これは先行研究を一部支持する結

果であり、高校生の時点ですでに社会における平均的な性的マイノリティに関する知識を有していることが分かった（釜野ほか, 2016）。中学・高校の知識量の差については、日高（2017）は10代のLGBT当事者の約75%が「一切習っていない」あるいは不適切な情報を学んでいたことを明らかにしており、中学においてはこの傾向が合致していた。この中学と高校の知識量の差については、高校で性的マイノリティについて取り上げる教科書が増えたことや、高校進学に伴う携帯電話の普及により、SNS等を通じて性的マイノリティに関する情報へのアクセシビリティが高まることが要因として考えられるものの、引き続き背景にある要因の検討が必要だと考えられる。

また、多様な性に関する授業前後の知識量を比較すると、中学でも高校でも性的マイノリティに関する知識は有意に上昇したことから、先行研究と同様、性的マイノリティを含む多様な性に関する授業は生徒の知識を向上させることが分かった（福島, 2015）。特に正答率は、中学では約7割、高校では約9割にまで上昇しており、高校だけでなく中学でも授業実施の効果が表れていたといえる。

しかし、質問項目ごとに見てみると、中学では授業後でも「2：性別は男か女のどちらかである」「6：セクシュアリティ（性のあり方）は人の数だけある」の正答率が6割程度と低かったことから、学校文化にある男女二元論から脱却できていない生徒や、多様な性に関する知識を自分自身のセクシュアリティに置き換えて考えることができていない生徒が一定数いることが示唆された。これらの背景には男女二元論や異性愛中心の社会があることが影響してい

ると考えられることから、まずは学校現場で「隠れたカリキュラム」として男女二元論や異性愛中心主義が学校現場にも持ち込まれていることについて自覚的な教員を増やすことや、教員や生徒が自身のセクシュアリティについて考える機会を継続的に増やしていくなどの対策が必要だと考えられる。これまで多様な性や自身のセクシュアリティについて学んでこなかった教員から変えていくことで、生徒の意識も変わるだろう。

また、中学・高校ともに「7：セクシュアルマイノリティの人は国内に約1%いると言われている」の正答率が授業前後で他の項目に比べて最も低かった。このことから、性的マイノリティが身近にいるという体感がないからこそ、数値ほど存在しているということを具体的にイメージできずに授業を終えた可能性があることが考えられた。

これらの結果から、すでに高校生の方が中学生よりも性的マイノリティに関する知識を有しており、性的マイノリティを含む多様な性に関する授業を実施すると、中学・高校ともに知識が約7割以上に上昇することが分かった。しかし、この正答率はあくまで今回の質問紙の結果であり、単純に先行研究の結果と比較できない部分も多い。このことから、今後は性的マイノリティの基礎知識の範囲や、評価項目を作成するなど、教育実施上のカリキュラム整備が課題となることが考えられる。

## 2. 価値的・態度的側面

まず実態として、すでに授業前から、約半数以上の中学・高校生が性的マイノリティに対してポジティブな価値観や態度を有しており、中

学生よりも高校生の方がその割合が有意に大きいことが明らかになった。この結果は、中学・高校を10代という世代の集合体で見ると、若い年代の方が性的マイノリティに対して受容的であるという釜野ほか（2016）の調査結果を支持する結果となった。また、この実態の詳細について、質問項目の結果から、主に4つの傾向があることが分かった。

1つ目は、「4：自分のセクシュアリティに関わらず、ありのままの自分を大事にしたい」と「5：その人の特性にかかわらず、周囲の人を大事にしたい」へのポジティブな回答率が中学・高校ともに7割以上であったことから、既に中学・高校生は多様な性も含む自他の尊重という価値観を有している点である。しかし、この結果についてはネガティブな回答を選びにくい公正動機が働いた可能性も考えられるため、感想など質的な視点での分析も必要だと考えられる。

2つ目は、「身近な人にカミングアウトされても力になりたい」に対し、中学・高校で約7割以上がポジティブな回答をしていたことから、若い世代が性的マイノリティに対して受容的である釜野ほか（2016）の調査結果と一致していたことである。この点について、今回は性差を見ていなかったことから、今後は先行研究と同様、検討の余地があると考えられる。

3つ目は、性的マイノリティを揶揄する発言があってもそれを見過ごしてしまう環境や、多様な性について知ることの重要性を意識できていない中学生の実態である。「3：LGBTをネタにしている人がいたら注意していきたいと思う」「6：多様な性について中学生（や高校生）に伝えるべきだ」「7：LGBTについて学ぶ

ことは他の多様性について考えることにつながると思う」について、事前では中学生の約4割の生徒がネガティブな回答をしていた。この傾向は、セクシュアリティを自覚する第二次性徴の時期にあたる中学生のうちに、性的マイノリティに対するいじめを容認する態度がある実態と一致していることが考えられる（中塚，2011；日高ほか，2015）。しかし、授業後にはこの態度は改善したことから、多様な性に関する教育を行うことで性的マイノリティに対する周囲の状況が改善される可能性が示唆された。

4つ目は、中学生自身の多様な性への所属感の低さである。「1：多様な性についての話は自分には関わりのないことだと思う」は授業前の段階で他の項目と比較して最も低く、中学で45.2%であった。これは、知識的側面で聞いた「6：セクシュアリティ（性のあり方）は人の数だけある」への正答率が19.8%と低いことと関連している可能性が考えられる。この結果から、中学生は高校生よりも多様な性に関する知識がなく、結果的に自身が多様な性の中の1人であるという相対的な視点を持っている割合が少ない可能性が示唆された。この項目も授業後にポジティブな態度を選択する生徒が増加したものの、「性的マイノリティ」と「普通」のように分断された考えを持つ生徒がいる可能性が考えられた。

こうした実態や事前・事後の価値・態度得点の比較結果から、高校生の方が中学生よりも性的マイノリティに対して約7割前後がポジティブな価値観・態度を有しており、性的マイノリティを含む多様な性に関する授業を実施すると、中学・高校ともに知識が約8割に上昇することが分かった。このポジティブな態度が増加

する背景には、先行研究が指摘するように、知識量の増加が関連していることが考えられる（和田，2008）。今後はこの知識と態度の関連性だけでなく、性差とポジティブな態度についても検証することが必要だと考えられた。

### 3. 本研究の示唆と今後の課題

本研究の結果から、中学では既に約2割程度、高校では約半数が性的マイノリティに関する知識を有している一方、中学・高校ともに性的マイノリティに対して約7割前後がポジティブな態度を有している実態が明らかにされた。また、性的マイノリティも含む多様な性に関する授業を実施することで、これらの生徒たちは知識も増え、態度もポジティブな方向へ有意に変化した。これらのことから、多様な性に関する授業を実施することは、性的マイノリティへの理解に繋がることが示唆された。

なお、今後の課題として、まず質問紙の精度があげられる。今回の質問項目は因子分析を実施しておらず、質問項目の妥当性や信頼性の検証は行われていないことから、知識的側面や価値的・態度的側面を測れていたかは課題が残った。また、今回のデータは事前と事後の調査協力者が集団では対応していたものの、個々では対応していなかった。このことから、授業前後で対応したデータによる分析を行い、知識的側面と価値的・態度的側面について、より詳細な関連性を引き続き検討していくことが望まれる。

### 付記

本研究は認定特定非営利活動法人 ReBit の出張授業の一環で実施され、調査内容に同意いた

だいた学校に実施されました。本研究の調査にご協力いただいた中学校・高校の生徒のみなさま、先生方に心より感謝申し上げます。

また、本研究は公益財団法人三菱財団（2018年度）の助成を受けて実施されました。

## 参考文献

- 石丸径一郎（2004）. 性的マイノリティにおける自尊心維持—他者からの受容感という観点から— 心理学研究, 75, 191-198.
- 釜野さおり（2019）. 「大阪市民の働き方と暮らしの多様性と共生にかんするアンケート」結果速報 Retrieved from <http://www.ipss.go.jp/projects/j/SOGI/index.asp> (2019年8月23日)
- 釜野さおり・石田仁・風間孝・吉仲崇・河口和也（2016）. 性的マイノリティについての意識調査—2015年全国調査報告書— 科学研究費助成事業「日本におけるクィア・スタディーズの構築」研究グループ（研究代表者 広島修道大学 河口和也）編
- 戸口太功耶・葛西真記子（2016）. 性の多様性に関する教育実践の国際比較 鳴門教育大学学校教育研究紀要, 30, 65-74.
- 中塚幹也（2011）. 自殺総合対策大綱改正に向けての要望書 Retrieved from [http://www.okayama-u.ac.jp/user/jsgid/jisatsusogotaisakutaikou\\_teigen\\_111012.pdf](http://www.okayama-u.ac.jp/user/jsgid/jisatsusogotaisakutaikou_teigen_111012.pdf) (2016年5月20日)
- 日高康晴（2017）. LGBT当事者の意識調査—いじめ問題と職場環境等の課題 Retrieved from [http://www.health-issue.jp/reach\\_online2016\\_report.pdf](http://www.health-issue.jp/reach_online2016_report.pdf) (2019年7月2日)
- 日高康晴・古谷野淳子・松高由香・星野慎二（2015）. インターネットによるMSMのHIV感染予防に関する行動疫学研究—REACH online 2014 厚生労働省エイズ対策政策研究事業 個別施策層のインターネットによるモニタリング調査と教育・検査・臨床現場における予防・支援に関する研究（研究代表者：日高康晴）平成26年度総括・分担研究報告書, 9-35.
- 福島静恵（2015）. 多様性を認め合う関係づくりを目指したセクシュアリティ教育の試み—支援教育の視点に立った組織的な取組を通して— 神奈川県立総合教育センター長期研究員研究報告, 13, 55-60.
- 文部科学省（2008）. 人権教育の指導方法等の在り方について〔第三次とりまとめ〕 人権教育の指導方法等に関する調査研究会議 Retrieved from [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/024/report/08041404.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/024/report/08041404.htm) (2019年7月15日)
- 文部科学省（2015）. 性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細やかな対応の実施等について（通知） Retrieved from [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/27/04/1357468](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/27/04/1357468) (2015年5月2日)
- 渡辺大輔（2012）. 第6章 性教育の基本となる「多様な性」を学ぶ授業でのポイント 浅井春夫（編）はじめよう！性教育—すべての子どもが性を学ぶための入門書（pp.121-135） ボーダーインク
- 和田実（2008）. 同性愛に対する態度の性差—同性愛についての知識、同性愛者との接触、およびジェンダー・タイプとの関連— 思春期学, 26, 322-334.
- 和田実（2010）. 大学生の同性愛開示が異性愛友人の行動と同性愛に対する態度に及ぼす影響 心理学研究, 81, 356-363.